福澤諭吉の近代社会構想と中津

西澤　直子

目　次

一　福澤諭吉における中津
二　中津藩と福澤家
三　福澤諭吉の「御変革」意識
四　中津留別之書
五　中津市学校
六　近代社会の形成
七　中津にとっての福澤と福澤にとっての中津

一　福澤諭吉における中津

福澤諭吉は天保五年一二月一二日（一八三五年一月一〇日）に生まれ、一九〇一年二月三日に歿した。六六年と少しの生涯は、ちょうど明治元年となる一八六八年で真二つに分かれる。すなわち彼は近世を三三年間、明治以降の近代を三三年間生きたことになる。父は中津藩士であったが、諭吉誕生時には蔵屋敷の回米方として勤務していたため、彼は大坂で誕生した。一歳半で父が歿し、一家は中津に戻ることになる。その後一九歳までを中津で過ごし、蘭学を学ぶために長崎に出て、さらに大坂に向かい、大坂の緒方洪庵の適塾で学んでいる時に、江戸中屋敷内の塾で蘭学を教える藩命が下った。その後は江戸、東京に住み、時折帰省はするが、継続して中津以外で生活した。

彼には三之助という兄があり、そのため幼児期から叔父である中村術平の養子となったが、兄が三〇歳という若さで歿したため、中村家から除籍して福澤家を継いだ。福澤が生涯の半分を、中津藩士の息子あるいは中津藩士として、近世の封建体制のもと中津藩という組織の中で過ごしたことは、彼の思想形成

や近代化構想を考える上で、検討すべきひとつの視点である。

彼の著作の中で、現代までに最も多くの読者を得たであろう『学問のすゝめ』初編の「端書」には、同書が「故郷中津に学校を開くに付、学問の趣意を記して、旧く交りたる同郷の友人へ示さんがため」の書であったことが記されている。[1] このことに端的に表れるように、幕末から明治初期にかけての福澤諭吉の業績は、教育活動であっても著作活動であっても、そのほとんどが「中津」を抜きにしては考えられない。

しかしながら、彼の晩年の著作のひとつ『福翁自伝』では、中津はずいぶんと分が悪い。横文字を読める人物は誰もいなかったと書かれ、保守的な土地柄にあわず後足で砂をかけるように出て行ったこと、中津藩は明治維新期にあっても改革の決断ができなかったことなどが描かれている。[2] そのため、彼と中津藩の関係は、彼からの拒絶としてとらえられることが多い。実際には一九歳で中津を離れた後も、前述のように中津との交流は深く、のちの彼の著作の根幹ともいえる、明治三（一八七〇）年に著わした「中津留別之書」では、「人誰か故郷を思わざらん、誰か旧人の幸福を祈ざる者あらん」と述べている。[3] 彼の近代社会に対する構想は、「中津」を足掛かりに構築されたといっても過言ではない。

本稿では、福澤が中津にもたらしたものは何か、他方中津が福澤にもたらしたものは何かを探り、そこから彼はどのような近代社会を構想したのか。福澤にとって「中津」とはいかなる存在であったのかについて考察を試みる。

二　中津藩と福澤家

（一）中津藩の学問

中津藩は、譜代一〇万石（実高五万三千石）の大名であり、廃藩時には豊前（上毛・下毛・宇佐三郡一六四か村）で六二〇七六石余、ほかに飛地として筑前（怡土郡二九か村）で一七九〇八石余、備後（甲怒・神石・安那三郡三六か村）で二〇〇一五石余を有していた。細川氏小笠原氏の跡を継いで、享保二（一七一七）年に奥平氏が入府し、最後の藩主昌邁まで続いた。

前述のように、福澤は中津の保守性を強調し、特に蘭学については「（一九歳で蘭学を学ぶために長崎に出た―筆者注）その時分には中津の藩地に横文字を読む者がないのみならず、横文字を見たものもなかった」とまで書いている。[4] 一三石二人扶持という下級武士の福澤の周囲には、蘭学を学ぶ者がいなかった可能性もあるが、極端な表現である。中津藩は蘭学と無縁どころか、『中津辞書』のような特筆すべき業績すら存在した。

中津と蘭学との関係でもっとも知られている事柄は、江戸築地鉄砲洲にあった中屋敷内で行われた、藩医前野良沢らによる『ターヘル・アナトミア』の翻訳であろう。宝暦八（一七五八）

年から安永九（一七八〇）年まで在位した三代藩主昌鹿は、中津藩医であった前野良沢の蘭語学習を援助し、前野は杉田玄白らと『ターヘル・アナトミア』を翻訳して、安永三（一七七四）年『解体新書』を出版した。中津藩主の中には他にも、昌鹿のように蘭学を支援した藩主がいる。五代昌高は蘭癖の異名をもつ薩摩藩主島津重豪の次男として生まれ、養子縁組で中津藩主となった。在位期間は天明六（一七八六）年から文政八（一八二五）年で、オランダ商館長ヅーフとの親交が深く、同人からフレデリック・ヘンデリックの名を与えられている。またオランダ商館の医員であったシーボルト（Siebold, Philipp Franz von）の日記に、頻繁に登場する日本人である。[5] 文化七（一八一〇）年には、イロハ引の日蘭対訳辞書『蘭語訳撰』（通称『中津辞書』と呼ばれる）の刊行、文政二（一八一九）年には、藩医村上玄水が九州で二番目の解剖を行うことを援助した。

福澤が直接仕えた八代藩主昌服も、天保一三（一八四二）年から慶応四（一八六八）年五月までの在位期間に、嘉永二（一八四九）年には、辛島成庵、藤野啓山ら一〇名に許可を与え初めて種痘を実施した。翌年には、兵学師範ら藩士一四名を象山に入門させ、さらに四年、江戸下屋敷に松代藩の佐久間象山を招聘して、洋式の教練も行った。象山は知人にあてた書簡のなかで「独り中津藩ハいつれも出精にて頗る可観様に相成申候」と述べている。[6]

このような中津藩の様相をみると、先の福澤の言葉は、『福翁自伝』の口述筆記が始まり完成原稿ができる、明治三〇年から三一年頃の時代状況や、当時の福澤の心境を十分に考慮しなくてはならないであろう。ただ、右記のような中津藩と蘭学の関係が、蘭学が奥平家の家学あるいは中津藩の藩学として成立するまでに至っていたかといえば疑問である。蘭学が学問系統として命脈を保ち、明治維新後の洋学校中津市学校まで結びつくと考えることはむずかしい。中津はやはり漢学の地であり、奥平家が丹波宮津から入封する際伴ってきた儒者たちの古義学に始まり、一九世紀に入れば亀井学派の影響なども受け、多様に展開していた。寛政八（一七九六）年に設立された藩校進修館のほかにも、様々な家塾が存在した。

明治期に長くドイツ公使を務め、オランダ公使やイギリス公使を歴任した外交官青木周蔵の自伝には、幕末の中津の学問環境が綴られている。青木は長門国厚狭郡小埴生村の医師の子として生まれたが、父は平民身分であったため藩校明倫館に通うことは許されず、また松下村塾も塾生の多くは藩士と交友関係があり、士族でなければ「学友との交際円滑ならざる」と思われた。また医学では「物足ら」ず、「何とかして国家に益する学問、即ち、政治に関係ある学問」を学びたいと考え、それには「宇部の学校〔晩生堂〕」ではかなわず、豊後日田の広瀬淡窓の咸宜園に入ろうと考え、万延元年まず郷里の対岸にある中

津までやって来た。そこで中津城を見た青木は、すぐに日田に行くより、一〇万石の城下町で学ぼうと考えたという。医学や僧侶になるための「隠者的の学問」を学ぶならば日田もよいかもしれないが、自身の目的は異なる。中津であれば「奥平家の藩校」もあり「多少の学者」もいるであろう、藩校に入れなくとも「奥平家の藩士と交はらば、便宜多からん」と信じ、人に尋ねて朱子学派なら某、徂徠学派なら手島物斎（仁太郎）と聞いて、手島を訪ね面談し、「手島先生の懇諭に悦服し、直に束脩〔入学金〕を収めて入門」した。物斎歿後は橋本塩巌に学び、文久二（一八六二）年まで中津に滞在した。青木は滞在中、「蘭学に通ずる者」の大江久、神尾雄策、藤本玄岱を訪ね、漢学の素養に富んだ大江から蘭学の講習を受け始めたが「頗る浅薄」で学業が進まなかった。他にも蘭方医が自宅や藩校で物理学や医学の講習をしており、青木はそれらを聴講して漢学の「到底将来の活世界に処する能はざるを悟」ったという。[7] 青木の言葉からは、譜代一〇万石の藩としての水準を保った漢学が展開する一方で、その学問的将来性は蘭学に遠く及ばず、しかし蘭学は、蘭方医による自然科学を中心とした知識の授受に止まっていた様子が窺える。

（二）福澤家と中津

福澤は、明治五（一八七〇）年に次女にあたる子どもが死産であった時、東京に墓をつくることを思い立ち、翌年その横に「福澤氏記念之碑」を建立した。[8] その碑文中に「福澤氏の先祖は信州福澤地名の人なり」という一文があり、福澤家が信州の福澤（現在長野県内に「福澤」と称する場所が一一か所確認できるが、そのいずれであるかは確定されていない）の出身であったことがわかる。おそらくは小笠原氏の転封にともなって中津に移り、浪人となったのち、縁があって奥平家に仕官することになったのではないかと推測されている。[9] 家系は明らかではなく、福澤は碑文に「福澤氏の先祖は必ず寒族の一小民なる可し」と刻んでおり、調査する積りもなかったといえる。福澤家には、文政一三（一八三〇）年に竜王浜に碑を建てた頃、父百助が調べて作成したと思われる福澤家系図があった。[10] その年百助は業績が認められ、ちょうど家格が小役人から供小姓へ昇格した時で、由緒書を藩に提出する必要が生じたのか、百助は祖先調べを行い系図にまとめたのであろう。「福澤氏記念之碑」の碑文は、その系図に基づいて作成されたと考えられる。系図作成の時点ですでに、宝永六（一七〇九）年に歿した兵助以前のことはわからなかったが、家系や家門に関心がなかった福澤は、前述のように「福澤氏記念之碑」にそのままを踏襲した。福澤家は少なくとも一五〇年ほどの間、中津の下級士族の一員であったといえる。

三　福澤諭吉の「御変革」意識

（一）人材養育による富国強兵

中津藩の一下級武士であった福澤に訪れた大きな転機は、安政七（万延元、一八六〇）年の渡米であった。これは正式な派遣ではなく、自らの目でアメリカを見たいと考えた福澤が、幕府が派遣する咸臨丸に提督として乗り込む、軍艦奉行木村摂津守喜毅に頼み込み、木村の私的な雇い人としての渡米であった。しかし私的な従者の身分とはいえ、当時アメリカを見聞してきた人間は非常に少なく、帰国後は幕府にも雇われることになった。外国方として外交文書の翻訳に従事し、福澤は中津藩士でありながら、幕臣にもなった。

文久二（一八六二）年、徳川幕府は開港開市延期および樺太国境制定に関する交渉のため、使節をヨーロッパに派遣することになり、福澤にも通詞として随行の命が下った。日本を出てから日本に帰ってくるまで、ほぼ一年間フランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガル等の国々を見聞することになった。主務は文書の翻訳と思われるが、幕府は随行員にもうひとつの使命を課した。それは「諸産物諸器械製造方、大砲小銃之製作、金銀貨幣鋳立之仕法等」「各国政事学政軍制者、別而心懸取調可申事」、すなわち諸機械や武器、貨幣の製造、政治や軍事、教育制度などの調査である。[11] 徳川幕府もただ手をこまねいて諸外国に従っていただけではなく、積極的な改革を意図し、福澤らは多くの学校、工場などの施設を見学した。その様子は最初にフランスで購入した「西航手帳」と呼ばれる手帳、あるいは日録としてまとめられた「西航記」に書き留められている。障碍を持ちながら訓練によって話すことができるようになった少女に驚き、点字による教育や目の不自由な人びとへの授産の様子、女性労働力の利用、さらに不景気によって起る売春問題など多岐にわたる事柄に触れている。

福澤はロンドンから、文久二年四月一一日（一八六二年五月九日）付で中津藩の重臣であった島津祐太郎（復生）にあて、次のような手紙を送っている。

> 旅行中学術研究ハ勿論、其他欧羅巴諸州之事情風習も探索可致心得ニて、已ニ仏英両国ニても諸方ニ知己を求メ、国之制度、海陸軍之規則、貢税之取立方等承糺し、一見瞭然と申ニは参りかたく候得共、此まて書物上ニて取調候ハ、百聞不若一見之訳ニて、大ニ益を得候事も多く御座候
> （中略）
> 今般諸外国之事情篤と相察候所ニては、
> 本邦も此まて之御制度ハ無拠も、御変革無之てハ相済間敷、左候節ハ諸藩も其分ニ随ヒ、夫々改制有之ハ必然之義。肥前侯抔ハ疾く其御見込有之義と相見へ、此度も家来

三人医者砲術家蘭学者使節従僕え御頼込相成、全く欧羅巴諸州実地研究之為メと被存候。何卒御家にても、肥前侯え先鞭を着けられざる様、大変革之御処置有之度、私義も微力之所及ハ勉強仕、亡父兄之名を不損様仕度丹心ニ御坐候（中略）先ツ当今之急務ハ富国強兵ニ御坐候。富国強兵之本ハ人物を養育すること専務ニ存候。此まで御屋敷ニて人物を引立にハ漢籍を読を先務と致来候得共、漢籍も読様ニて実地ニ施し用をなし不申（後略）[12]

彼は命ぜられたようにヨーロッパの事情や風習を探索し、書物では理解し難かったことも、実際に見聞したことによって「大ニ益を得」た。ヨーロッパの進んだ文明に直に接した福澤は、日本にとっての「急務」は「富国強兵」であると考えるに至る。そして彼が考えた「富国強兵之本」とは、「読様」を学ぶ漢学ではなく、洋学によって「人物を養育すること」であった。近代化された各国を目の当たりにして、西洋文明を単なる知識ではなく、体系的に学ぶ必要を感じた。渡欧するまで、福澤の中で日本あるいは国家という枠組みに対して、どれほどの認識があったか。もちろん概念上の理解はあったが、自らの思考を体系づける基軸としての日本に対する意識は、世界の中で日本がいかなる立場に位置づけられるのかを、身をもって体験したことによって自覚されたと考えられる。日本を出港してからヨーロッパに至るまでの間に、植民地化されたアジアの都市にも寄港した。自らの生活を守るために必須であるのは、日本の独立であり、そのためには、西洋に対峙できる力が必要であることを実感したであろう。

前掲の書簡は中津藩の重臣に宛てたもので、ゆえにそこで述べられているのは、あくまでも中津藩をいかに変革すべきかである。しかしヨーロッパ各国各都市と比較して中津を捉えているわけではなく、日本という国に対する意識のもと、日本を支えるうえでの中津藩の役割を認識し、そのためにはいかなる変革が必要であるかを語っている。

福澤は、漢学は「漢籍」の「読様」の学問であって「実地ニ施し用をなし不申」、現実には役立たないという。日本が西洋諸国と対峙するためには、これまでに行われてきたような、素読による暗記を入口とする漢学教育ではなく、物事の道理を科学的に思考していく洋学による教育への「大変革」がなされなければならないと考えた。

彼は帰国後、中津藩から預かっていた「一小家塾」を、近代的な学塾として制度を整えていくことを決意する。[13] 文久三年には、入学者を記録する「姓名録」（のち「入社帳」と呼ばれる）を設け、また福澤ひとりの力では限界があるため、元治元（一八六四）年には学塾経営を補佐してくれる優秀な人材を中津に求め、小幡篤次郎・甚三郎兄弟をはじめとする六名が入塾し

た。教授内容も英学が中心となり、馬場辰猪によれば慶応二年頃には、徐々に英学塾として知られ始めていた[14]。

また前掲「西航手帳」や「西航記」を基に『西洋事情』を著し、慶応二（一八六六）年に初編を出版した。その後二度目の渡米を経て、明治元年（表記は慶応三年）に出版された『西洋事情外編』では、文明を知るためにはその「柱礎屋壁」を知ることが重要であるとし、表面の現象だけを見るのではなく、文明の基本的な構造として「人間」「家族」といった視点からも説明している[15]。

（二）君主体制下における文明開化

しかし福澤は、「御変革」「大変革」が必要であると言いながらも、その変革はあくまでも封建体制の枠組みの中での取り組みであって、統治理念そのものを変革し、新しい政治体制へ大きく転換していかなければいけないと考えていたわけではなかった。封建体制に代わる新しい国家、新しい社会が生まれなければいけないとは考えていなかった。先に掲げた書簡には、「肥前侯え先鞭を着けられざる様」と肥前藩への対抗意識が見られ、それは一方では彼の幕藩体制に対する意識を示している[16]。

慶応二年二月六日には、同じ島津祐太郎にあて、次のような書簡を送っている。

中津に文学の教なし。世間見ずの田舎風にて、才も不才も門地を以て無上の天爵と思ひ、世間普通の道理を知らず、去迚又真の田舎風を守り尽忠報国の外他事なしと一片の丹心あるにあらず。才ある者は狡猾姦佞に流れ、才なき者は頑癖固陋に陥り、人々己が所業を好き事と思込み更に一和することなし（中略）

則其策は文学此迄の漢学にあらず趣意は或云随筆に詳なりを盛にするなり。方今中津中に文学を引立、人々見聞を博くし、人の人たる道理を知らしめ、銘々向ふ所を知り安ずる所を得ば、各才不才の分を守るを知り、之を小にすれば一身の楽にもなり、之を大にすれば国家を憂ふるの大趣意を解し、豈計らんや此まで喜びし事は喜ぶべきにあらず、此まで怒りし事は怒るべきにあらず、昨日の争は今日の譲りとなり、昨日捨てたるものは今日争ふに至り、御家中の喜怒哀楽一変して人気調和し、従ては富国強兵の道も開け可申哉に存候（中略）

西洋学と申は、砲術器械術航海術抔業前の事を指すにあらず、学と術とは自ら分別に有之事に御座候[17]

ここで福澤が「文学」という言葉で表現しているのは、文意からわかる通り学問のことである。中津には「文学」がなく、「文学」を盛んにしなければいけないと述べたうえで、学問を

盛んにすることで人びとは見聞を広め、「道理」や「分」を知る。そのことによって小さくは「一身の楽」が得られ、大きく広げれば「国家を憂ふるの大趣意」を理解する人材になるという。そして学ばなければいけない「西洋学」は、「術」ではなく「学」である。砲術や航海術など、技術だけを西洋に倣おうというのではなく、もっと根本的な西洋のものの見方、ものの考え方を学ばなくてはいけない。書簡中に登場する「或云随筆」には、子どもに対し意味を理解できない論語や大学を学ばせるより、地理学や窮理学が大きな効果を生むことや、「霊智」の「鍛錬」によって「理を通識」すること、「物理」の重要性が述べられている。[18]

この書簡の中で、福澤は「国家を憂ふる」と「国家」という言葉を使っている。また「或云随筆」の中でも、「封建世禄の臣は国君一身のみに忠を尽すを知て報国の意薄し」と封建体制下の「国」に対する意識の薄さを述べている。しかし、この書簡で彼は、藩の重臣に対して中津藩における改革を述べているのであり、望んでいるのはあくまでも封建体制下における改革である。慶応二年の長州再征の際には、「第一条　長賊外交の路を絶其罪状を万国へ鳴候事」「第二条　内乱御鎮圧に付外国の力を御用相成度事」から成る、長文の長州再征に関する建白書を提出している。[19]

彼は、国家体制を変えるということは考えてはいなかった。ただ独立した国家であり続けるために、「日本」あるいは「国家」に対して、強い自意識を持つことを重視するようになり、徳川政権下における外交権の確立と行使によって、国を保つことを考えるようになったといえる。例えば文久三年の薩英戦争について、同年隈川宗悦、南条公健に宛てた書簡で「公辺の御所置さへ宜敷候はゞ、少々の間違は可有之候共、容易に彼より兵端開き候事は有之間敷奉存候」と外交交渉の重要性を述べている。[20]先の「或云随筆」には次のような一節もある。

> 人は旅行して初て自分の生国を他国と比較し、随て人の欲にて本国の事を自慢する心も生ずるものなり。今の日本人も欧羅巴辺に旅をさしてヨクく諸外国と我本国とを見較べなば、日本国の威を落さず世界中に対して外聞を張るの本趣意を解す可き乎[21]

海外体験が強い「日本」「国家」意識を生んだ。しかし、体制変革の必要性にまでは至らなかった。福澤の考えが、統治理念の変革や国家体制の改革にまで至ってはいなかったことは、先に引用した島津宛慶応二年二月六日付の書簡に「近来は世上不穏、動もすれば下より上を凌ぎ、国法を恐れざるの悪風流行」と上下秩序を重んずべきを述べており、また同年一一月七日で次のように述べることからもわかる。

大名同盟之論は不相替行はれ候様子なり（中略）随分国ハフリーに可相成候得共、This freedom is, I know, the freedom to fight among Japanese.　如何様相考候共、大君之モナルキニ無之候而は、唯々大名同士之カジリヤイニて、我国之文明開化ハ進ミ不申。今日之世ニ出て大名同盟之説を唱候者ハ、一国之文明開化を妨け候者ニて、即チ世界中之罪人、万国公法之許さゝる所なり[22]

当時盛んに議論されていた雄藩の連合による政治体制に対して、福澤は批判的であった。「大名同盟之論」は大名同士の「カジリヤイ」、すなわち大名同士が争うだけの話であり、その中では「一国之文明開化」は進んでいかない。「大君之モナルキ」、つまり安定的な徳川政権下でなければ、文明の進展はないと考えていた。直接西洋文明に触れた経験をもつ福澤にとって、最重要課題であり急務であるのは、日本の独立維持とそのための「文明開化」であり、大名同士の「カジリヤイ」は得策ではなかった。

彼の考えは、王政復古が行われた後でも、変わることはなかった。慶応三年一二月一六日付でイギリスに留学中の福澤英之助に宛てた書簡には、次のように書かれている。

外国え長く滞留いたし候得は、自然ニ彼国の風俗ニ慣れ、何事もフリーを望候様相成候得共、日本ニ生るれば日本之風俗有之、如何ともすべからざるものニ有之、若しこれを破るときは、其身生涯之不幸ハ申迄も無之、所謂禍父兄ニ及ふと申場合ニ至るへく、よく〳〵御考合可被下候（中略）

王制復古、京師に議政所を立へしと云ふ。紀州其外御譜代御家門之面々ハ、寧ロ亡恩之王臣たらんより、全義の陪臣たらんと云ふ。薩土之議論公平ニ似たれとも、元来私意より出てし公平論なれば、事実行はれ難かるべし。御家門御譜代之面々奮発せんとすれとも、内実力なし。如何にも恐入候御時勢ニ御座候。小生輩世事を論すへき身にあらず。謹て分を守り、読書一方ニ勉強いたし居候[23]

「王制復古」に対して懐疑的であり、譜代や家門大名は「寧ロ亡恩之王臣たらんより、全義の陪臣たらん」と、恩を忘れて朝廷の臣となるくらいなら義を全うして徳川の臣（朝廷の陪臣）となるであろうし、薩土の議論は公平のように見えて、もとは「私意」から出た「公平論」であるから行われ難いであろうと推測している。

福澤がなぜ、徳川幕府が安定的な政権を再構築し継続できると考えていたのか。英之助宛ての書簡では、外国生活に慣れれば何事も「フリー」を望むが「日本之風俗」は「如何ともすべからざるもの」であるゆえ、「父兄」に禍が及ぶことを考える

ように諭している。この背景には、彼の身近に起こった出来事が関係していよう。神奈川奉行組頭の脇屋卯三郎という人物が、親戚への書簡に「穏かならぬ御時節柄で心配」であり「どうか明君賢相が出て来て何とか始末をしなければならぬ云々」と書いたことを咎められ、将軍を無き者にして明君を欲する謀反人として牢につながれ、ついに切腹に至ったことや、二度目のアメリカ行の帰国直後の慶応三年七月に、彼にとっては罪に問われるとは思ってもいなかった行動によって弾劾を受け、幕府から謹慎を命ぜられたことがあると思われる。[24] 幕臣であった福澤の周りでは依然として、幕府の威信が感じられ、幕藩体制の余力を感じていたと推測される。

(三) 版籍奉還後の転換

しかし実際には政権は大きく動き、版籍奉還を迎える。この時点になって、福澤はようやく版籍奉還を受け入れざるを得ないと考えるに至る。

> 必ずしも横文の書を読まずとも出来可申、さ様候へば人の無知なるは必ず横文なきゆゑにあらず、畢竟文学の方向を誤り文味を重んぜざるの罪なり。此まで漢学者流の悪風にて、書を貴び文を重んずる抔と唱へ、聖人の道は高しとて平人を導くを知らず、殆ど仙人の境界に安んじ、さて其書は何物と尋ねるに、数万巻の書にあらず、僅に数十巻の書を数百度も繰返し、所得は唯スレーブの一義のみ。其一身を売奴の如く処しながら、何として其国を独立せしむべきや、何として天下の独立を謀る可きや。小生敢て云ふ、一身独立して一家独立、一家独立一国独立天下独立と。其の一身を独立せしむるは、他なし、先づ智識を開くなり。其の智識を開くには必ず西洋の書を読まざるべからず
>
> (明治二年二月二(二〇カ)日付松山棟庵宛書簡)[25]

> 既ニ十万石之奥平様ニても、時勢之為メニは版籍奉還之議ニ従はざるを得ず。然ハ則方今の急務ハ、唯無知文盲之域を免れ、人々の才徳ニ応し独立不羈之生計を求るより他事無之
>
> (明治二年四月一七日付藤本元岱宛書簡)[26]

そして版籍奉還以降、人びとにとって急務であるのは、「才徳ニ応し独立不羈之生計を求る」ことであると述べる。幕府が崩壊し新しい政治体制に転換すれば、これまで維持してきた社会がなくなり、新たな社会を作らなければならない。そこで重要になるのは社会を構成する最少単位である個人の独立、それぞれが自分自身によって立ち、経済的に自立することである。そのためには、「西洋の書」を読み「智識を開く」ことが活路となる。「文学」の方向を誤らず、「文味」を重んじることが重

要である、つまり洋学を積極的に採り入れ、自分の中に智識を蓄えるという方向性と重要性を認識して、十分に努力をすべきことを述べている。そして彼の近代化構想は「一身独立して一家独立、一家独立一国独立天下独立」という言葉で語られるようになる。

彼がこうした構想を確立していく背景には、中津の士族の社会があった。前述のように福澤は、藩命による江戸出府以来ずっと江戸に住み、明治という時代を迎えた。そのとき中津には自らの年老いた母と兄の遺児である娘が一人いた。義姉は離縁をして再婚しており、福澤の母が孫と二人で生活していた。福澤は東京と中津で離れているのは不便なので、同居を持ち掛けるが、なかなか上京が実現しなかった。すべて段取りが整っても、結局最終的に中止になる。なぜそうなるか。調べてみれば、中津にはひとつの噂があった。福澤は幕臣として諸外国にも行き『西洋事情』も売れて、中津に戻れば「福澤の名跡御取建」、すなわち石高が増し大いに出世するであろうという噂であった[27]。福澤は驚き、中津の士族たちが版籍奉還の意味を理解していない現実を知る。確かに版籍奉還後も、家禄が支給される。しかしそれは、封建制度下で御恩と奉公の関係で与えられていた俸禄とは異なり、生活給付金のようなものであって、いずれなくならざるを得ないものである。福澤は中津の知人たちに対して、次のように自立の重要性を語る。

試ニ見よ、今日の武士諸大名の目より見て主家宗家とも迎[ゲイ]ぎし徳川氏も、忽地ニ滅却して痕なきニあらずや。陪臣の目より見て君父とも御主人様とも尊敬せし其大名ハ、此度知藩事とて一個の役人となりたるニあらず〔や〕。此行末ハ町人百姓の目より見て御武家様と恐れ怖きし武士も、忽地ニ無産の流民たらん（明治二年六月一九日付簗紀平宛書簡）[28]

天下の大名自家の封土をも保つこと能はず、先ツ十分一ニ減禄せり。其家来も心ある者ならば、百姓とか町人とか、思ゝ相応の活計ニとり付候こそ人たる者の本意ならず哉。それもいくじなくして、矢張旧来之知行ニかじりつき、心ならずも其米を喰ひ一日の安楽を貧る者ハ、其者の自業自得、敢て傍より責るニも不及候得共、既ニ其家来の籍を脱したる者を、今更其名跡を立るとは、あまりに時節違ひの議論ならずや。大凡天下の喰ひつぶしニて、近くハ大名の家の邪魔ものたるハ世禄の臣を最とす。

（明治二年八月二四日付服部五郎兵衛宛書簡）[29]

江戸時代において最も教養を積むことができた階層であり、為政者側として一番の当事者である武士たちが、体制の転換を理解できなければ、新しい社会の土台は非常に脆弱なものになる。武士たちが自らについて「無産の流民」であり「天下の喰

ひつぶし」であることを理解し自立するために、福澤は日本の近代化について明確な構想を示す必要性を感じたといえる。

四　中津留別之書

明治三年一一月に、遂に福澤は自ら母を迎えに中津に赴き、帰京の際人びとに「中津留別之書」を示す。[30] この「中津留別之書」は三五〇〇字程度の文章であるが、その後彼が生涯をかけて説いた事柄の本質が込められている。

福澤は、まず人はなぜ「万物の霊」であるのかから説き始める。智徳を修め、交際し、「一身の独立」をはかって初めて、人は「万物の霊」となる。その際、「一身の独立」は単に精神的な自立だけでなく、「一家の活計を立て」る、すなわち経済的に自立することが同時に行われなければならない。またこれまで中国や日本では等閑視されてきた「自主自由」や「自由独立」の重要性について説く。自由というと我儘と同義のように聞こえるが、そうではない。他人の妨げをなさずして自分の心に従って行動することで、「自由独立」を誤れば徳は修まらず、智も開かず、家も治まらず、国も立たず、天下の独立も望めない。「一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立すべし」と説く。

福澤が主張するところは、「一国」が成り立つ基は個人にあり、個人が精神的かつ経済的に自立し、自立した個人、一身独立した個人が結びついて「一家」を形成し、その「一家」もまた自立して、独立した「一家」が集って「一国」が形成される。上位からの形成、すなわちまず国家があり、国家にふさわしい家が規定され、家にふさわしい個人が規定されるのではなく、全ての基礎は「一身の独立」にある。

ここで彼は、「一国独立して天下も独立すべし」と述べるが、この「国」と「天下」の解釈は意見の分かれるところである。明治三年という廃藩置県前の段階であることや、そのあとに「士農工商」という言葉が出てくることなどから考えて、福澤は当時の人々が「国」と言ってイメージする「藩」を指して「一国」と言い、国家の意味で「天下」という言葉を使用していると捉えるのがひとつの説であり、この解釈の方が主流であろう。しかし、彼が「中津留別之書」において人びとに伝えたいことは、新しい社会そして国家体制のあり方である。これまで見てきた福澤の「日本」「国家」という言葉の使い方、「中津留別之書」のこの後の部分に登場する「一国衆人の名代」「国の安全」「国の政事」「大日本国」という言葉の意味を考えると、ここは「一国」が国家であり、「天下」は独立した国家が作り上げる関係性と捉える方が妥当であると考える。福澤は当時の読者のほとんどが知っていたであろう「修身斉家治国平天下」の概念を利用しながら、新しい枠組みを示したといえる。

続いて「中津留別之書」は「人倫の大本は夫婦なり」「男といい女といい、等しく天地間の一人にて軽重の別あるべき理なし」と、社会の基本は上下縦の関係ではなく、夫婦という横の関係であり、かつ男女は平等であることを述べる。平等であるがゆえに、夫婦は一夫一婦でなければならないとも述べる。福澤が「一家」を取り上げるのは、門閥、家門に繋がる「家」意識を払拭し、新しい意識を形成することを目的としたと考えられる。近世において実態としての家族は、階層差地域差も大きく多様であった。ゆえにここで福澤が意識しているのは、縦の関係から横の関係へという「一家」ひいては「一国」に繋がる軸のあり方である。

さらに親が手本となりかつ自立を助ける、親子関係のあり方も説く。そして千差万別様々な人間が生活する一国を独立国としてまとめるためには、政府や法律、官吏が必要であり、その役割についてわかりやすく述べている。

最後に、こうした人間世界の交わりを理解するためには、外国の書物を読むことが有効であるとする。目を洋学に開き、自らの食い扶持は自らの労働で得るよう経済的に自立し、人の自由を妨げずに自分の自由を達し、徳を修め、智を開き、卑しい心を一掃して、家内安全や天下富強が何たるかを知るべきである。福澤は「中津留別之書」を通じ、智徳の重要性を説き、人の交わりの大切さを説き、何よりも「一身独立」が必須であることを述べている。

版籍奉還から明治四年の廃藩置県までの間に、いくつかの藩では廃藩構想が生まれた。その一つ兵庫県の三田藩では、軍事力を放棄し学問を基礎とした職能化を進め、武によらず文によって立つことを考えたという。三田藩の家老職で明治以後は大参事も務めた白洲退蔵の手紙には、三田藩の構想を知った福澤が「コンデナクチャならん」と喜び、三田藩の構想は福澤と熟議の上で岩倉具視に提出されたことが書かれている。[31]

『福翁自伝』によれば、明治三年の帰省の折、彼は中津藩の重臣たちの前で次のような意見を述べた。中津藩の武備では戦争は出来ない、それならばいっそ武器は一切売ってしまって、「学校を拵えて文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせるという方針を執るが一番大事である」、すなわちそのお金を学校教育に使ったらどうか。しかし藩の重臣たちは丸腰になることはできないというので、そのままになった。[32] 奥村弘氏は、福澤が三田藩同様、教育によって立ち文明化を進めていく「文藩」構想を持っていたと指摘している。[33]

五　中津市学校

（一）設立経緯および資金

福澤は洋学の重要性を主張し、中津にも洋学教育を行う学校

をつくりたいと考えていた。前掲明治二年四月一七日付の藤本元岱宛書簡では、「中津ニも追々洋学御開相成候よし」「洋学を開くハ我輩之所祈」と述べている。[34] 版籍奉還以降、どの藩においても藩校の改革は課題のひとつであり、中津藩でも当然進修館をどう変えるかが議論になったと思われる。中津では藩校に洋学を取り入れるのではなく、別に洋学校を建てることになった。福澤は先の書簡で、洋学校ができるのであれば協力したい旨を述べている。

洋学校は、明治四年一一月に中津市学校（あるいは市校）の名称で設立された。詳しくは拙稿「中津市学校に関する考察」『近代日本研究』一六（二〇〇〇年）を参照されたい。なぜ「市」学校なのか、現在のところ由来を明文化した文書は見つかっておらず、正確なところは未詳である。近世において「市」はマーケットとは限らず、人びとの集まる場所として「市中」という用例のように使われており、おそらくは一般の人びとの生活空間としての「市」から転じて、人びとの学校という意味だったのではないかと思われる。最初の校舎は、三の丁東端の旧家老職生田邸が充てられたが、のちに中津県が作成した「中津市校洋学出金方法」によれば、最終的には中津の「町在」に四十か所程の私塾を建てる計画であった。[35]

この洋学校の資金は、奥平家の家禄の一部および士族たちの互助組織である天保義社からの拠出金で賄われた。[36] 教師は慶應義塾から派遣された。教師のなかには中津市学校に派遣されて教員としての経験を積み、また慶應義塾に戻ったものもおり、のちに福澤は中津出身者に無理をいって他の三分の一の給料で派遣したと述べている。[37] 初代の校長として赴任したのは、前述の小幡篤次郎であった。また学則類は慶應義塾に準ずることになっていたが、カリキュラムや授業料等に都鄙の差を考慮した。[38]

（二）教育内容と効果

科目は、原書、訳書、数学、習書が設けられ、特に訳書は初代校長小幡篤次郎の発案であった。明治五（一八七一）年三月二三日付高力衛門宛福澤諭吉書簡に、「全日本国内の人民をして悉皆原書家に為さんとするは、人力の及ぶ所にあらず。右の次第にて当時中津へは小幡篤次郎出張に候得共、原書教授傍専ら翻訳書を為読候趣向にて、頻りに訳書の学を主張いたし居候」と書かれていて、日本国中の人びとが原書を読めるようにするのは「人力の及ぶ所」ではなく、「訳書」を設け翻訳書を使いながら、西洋の書物に書かれている内容を学ぶことが行われた。[39] もし意味を解さずただ暗記していくのであれば、批判していた漢学教育と同様になる。重要なことは、思惟体系そのものを含めて学ぶことである。廣池千九郎著『中津歴史』によれば、のちには専ら英語による本科と訳書による別科が設けられ

た。[40]

明治八、九年ごろまでには生徒数は六〇〇名程になり、「関西第一ノ英学校」と称されるまでになった。[41] 明治一〇年五月に福澤が執筆した「旧藩情」では、学校が旧態然とした士族社会の刷新に寄与したとして、次のように述べている。

双方共にさらりと前世界の古証文に墨を引き、今後期する所は士族に固有する品行の美なるものを存して益これを養い（中略）心身共に独立して日本国中文明の魁たらんことを期望するなり（中略）即ちその路とは他なし、今の学校を次第に盛にすること、上下士族相互に婚姻するの風を勧ること、この二箇条のみ[42]

学校は「古証文に墨を引」くように、人間関係を新たにした。そして新しい社会をつくっていく「その路」は、学校を盛んにすることと通婚圏を広げることにあると述べている。「旧藩情」は中津藩について書かれたもので、ここでは中津市学校とは書かれていないが、当然同校のことを指していると考えられる。

中津市学校は発展を重ね、廣池千九郎が通った明治一三年の頃には、「読方、作文、習字、算術、物理、生理、ソノ他トスマタ一及ノ科目中、読方ハ左ノ書ヲ用ヒタリ。国史略、十八史略、元明史略、各購読」（「初忘録」）を学んだと述べている。[43] また諸外国と交際が進むなかで、これからは討論や演説が重要になると考えられ、慶應義塾では三田演説会が組織され、明治一五年には福澤は『時事新報』を創刊したが、中津市学校の中でも次のように演説法や会議法、ジャーナリズムも学ばれていた。

本校教師等既ニ校内ニ弁説会ナルモノヲ開キ、古老ノ士人亦往々来テ之ニ参列シ、泰西新奇ノ演題ヲ掲ケテ互ニ討論演説ス。又会議法ヲ講シ、新聞紙ヲ読ミ、自主自由ヲ談シ、殖産興業ヲ説キ、洋医ヲ尊ヒ、衛生ヲ論シ、時計ヲ携ヘ、寒暖計ヲ置キ、避雷柱ヲ設ケ、椅子立机ヲ用ヒ、洋服ヲ着、靴ヲ穿チ、蘭燈ヲ点シ、巻烟草ヲ吸ヒ、牛肉ヲ食ヒ、乳汁ヲ醗リ、洋食ヲ賞シ、麦酒ヲ飲ミ、廃刀断髪夙ニ欧米ノ風化ヲ学ヒ、文明ノ利器ヲ採用セシハ、地方実ニ其淵源ヲ本校ノ内ニ発セサルモノナシト云[44]

福澤は慶應義塾の教育について、学者だけをつくっていっても意味がないという。学者が学者をつくり、また学者をつくるのであれば、それは蚕卵紙から蚕卵紙をつくり続け、生糸を製造することを忘れてしまうようなものである。[45] 社会に貢献できる人材を輩出することが重要であり、そのため前掲のように中

津市学校でも、「殖産興業」が説かれている。また福澤は医学や衛生学について、特定の専門家だけが学べばよいとは考えておらず、人びとが身を守るために必要なものが医学であり、衛生学であると考えていた[46]。そうした考えが中津市学校にも反映し「洋医ヲ尊ヒ、衛生ヲ論シ」ていたと考えられる。またこの記事から衣食住において、学校内部はかなり洋風であったことが推測される。

(三)『学問のすゝめ』と「中津市学校之記」

中津市学校の創立にあたって、福澤はいくつかの文章を認めている。明治三年一一月に「中津留別之書」を執筆した後、明治四年一〇月ごろには「県内士民え文学告諭文」を執筆した。一〇月二日付で中津県が大蔵省に提出した「布告文上木伺」の中に、洋学校設立許可に伴い出版したい書として「県内士民え布告文」があげられていることから、その素案は遅くとも一〇月までに出来ていたことがわかる[47]。さらに一二月ごろに『学問のすゝめ』初編が執筆された。「県内士民え文学告諭文」と『学問のすゝめ』初編はほぼ同様の文章で、前者は県が出版するため「告諭」のかたちをとり、最後の方が少し異なっている。後述する「中津市学校之記」では、文中の「県庁よりさとしの文」という言葉が校正で「教師の著せし学問のすゝめの文」に訂正されていることから、「県内士民え文学告諭文」と『学問のすゝめ』初編は同様の目的を持って書かれたもので、「県内士民え文学告諭文」が先に執筆され、それを練り直して『学問のすゝめ』初編が出来上がったといえる。

『学問のすゝめ』初編の「端書」には、学校の開設にあたって中津市民に向けて書いたものを、「この冊子を独り中津の人へのみ示さんより、広く世間に布告せば、その益も亦広かるべし」といわれ、慶應義塾の活字版を使って出版する旨が書かれている[48]。作者は「同著」として連名になっており、一人は福澤諭吉、もう一人は元治元年の入塾生のひとりで、中津市学校初代校長小幡篤次郎である。

『学問のすゝめ』初編では、学問の重要性を説き、人間として等しく生まれながら相違が生ずるのは、「学ぶと学ばざる」による。「学問」とはただむずかしい字を知り、むずかしい古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど「世上に実のなき文学」を言うのではなく、「人間普通日用に近き実学」が大切であると説く。「学問をするには分限を知る事肝要」であり、「分限」とは「天の道理に基き、人の情に従い、他人の妨を為さずして我一身の自由を達すること」である[49]。

この『学問のすゝめ』初編より少し遅れて、次に「中津市学校之記」を執筆した。「中津市学校之記」は最後の藩主であった奥平昌邁の名前で出されているが、残っている原稿に見られる加筆訂正は福澤の筆である[50]。当時の昌邁の年齢が一六歳位で

あったことも考えれば、福澤がまず草稿を書き、誰かに清書させて、それにさらに加筆訂正を加えたと考えるのが自然であろう。「中津市学校之記」には、学校設立について次のように書かれている。

一独り事を為すハ、衆と共ニするの楽しきニ若かす。余此度独り外国ニ遊学すれとも、旧藩内の士民も余の志を助け、余の学ふ所の道を学ばんとするハ、固より願ふ所なれハ、本県の吏人ニ謀りて年々家禄の内五分の一を費し、旧藩士の積金ニ合して文学の資と為し、此度中津ニ一処の洋学校を開き、其外当県内の諸方ニ郷校を設るの議を決したれハ、旧藩の士卒族ハ勿論、百姓町人も余か微意を体して勉強いたし、三五年の後余も亦外国より帰り、互ニ学業上達の上再会いたすへき事、今より楽む所なり。

一此度学校取立ニ付き教師の著せし学問のすゝめの文ありて、其趣意既ニ詳なれとも、余も亦一言をこゝニ記して、士民の心得ニ供するなり。

学校設立の趣意については「教師の著せし学問のすゝめの文」に詳しいが、「余も亦一言をこゝニ記して士民の心得ニ供するなり」とあることから、「県内士民え文学告諭文」を改訂した『学問のすゝめ』初編に対し、「中津市学校之記」はそれを補完する目的で執筆されたことがわかる。

その視点で両者を比較すれば、『学問のすゝめ』が一般的に学問の奨励を説いているのに対し、「中津市学校之記」では「一身不羈の産」を立てるための学問の大切さを強調し、全体で二六〇〇字程度にすぎないその約半分を、武士の俸禄に関する記述に費やして「人間交際の道ニ於て躬から労して躬から食ふの大趣意」に理解を求めている。いつまでも俸禄ではない家禄を当てにしている武士たちに、精神的自立と同時に経済的な自立が伴う一身独立の重要性をとき、「忽地ニ無産の流民たらん」危機に対する自覚を促し、学問をよって立つところとして、一身を自立させるべきことを述べている。文中「旧藩の士卒族は勿論百姓町人も」とは書かれているが、「中津市学校之記」の主たる目的は、士族層への呼びかけにあったと考えられる。

「中津市学校之記」は、なぜ奥平昌邁の名で執筆されたのか。明治四年一〇月二二日から二四日にかけて華族の戸主たちが集められ、太政大臣三条実美から勅諭として、海外留学や洋行を奨励された。奥平昌邁は明治四年二月に慶應義塾に入学しており、年末にはアメリカに留学することになった。旧藩主たちの行動は、新しい近代社会を形成する際に模範となると考えられていた。福澤は、前掲のように「旧藩情」に「今後期する所は

士族に固有する品行の美なるものを存して益これを養い」と記し、士族の品行、さらには旧藩主たちが持つ気品を維持したいと考えていた。奥平昌邁が人びとの手本となって、自ら洋学を学び、「一身独立」する姿勢を示していくことで、社会変革の一助となると考えたのである。ゆえに自ら筆を執り、旧藩主から語りかける形式で、洋学を奨励する「中津市学校之記」を執筆した。奥平昌邁は渡米後、ブルックリンにあるPolytechnic Instituteに入学し、そこでspecial studentとしてともに学んだ仲間には、旧彦根藩主であった井伊直憲や旧姫路藩主であった酒井忠邦がいた[51]。井伊も酒井も慶應義塾で学んだのち同様に留学しており、福澤が旧藩主たちに寄せていた期待が窺える。

（四）活動の展開

明治一二年一二月、中津市学校は「市校世話人」を選出し、以後東京と中津で定期的に会議を持ち、今後の中津市学校の経営方針や具体的な活動を話合うことになった。一二年一二月一〇日から一六年四月一七日までの議事内容は、「市校事務委員集会録事」に記録されている[52]。それによれば、中津市学校は学校教育の場での人的金銭的投資に止まらず、さまざまな活動を行っている。

詳しくは前掲拙稿を参照されたいが、特に福澤や校長となった小幡と関わりが深いと思われる事柄として、まず士族に対する授産としての、養蚕製糸業の奨励が挙げられる。中津産生糸への褒賞金や養蚕の研修を行い、明治一三年一一月からは中津の女性二五名（うち二四名は士族の子女）が、富岡製糸場で機械製糸の伝習工女として修業することを援助している。途中「市校世話人」が富岡まで出張し、金銭的な援助も行って、一六年には無事業を修めている。

明治九年一一月一三日に中津において創刊された『田舎新聞』には、資金の貸付のほか、「市校世話人」の何人かが運営にも携わっていた。また先に掲げた記事中から、中津市学校が「弁説会」を開き「泰西新奇ノ演題」を掲げて互いに「討論演説」していたことが知れる。「市校事務委員集会録事」によれば、明治一三年四月七日の会議で「原書」を廃止して「演説堂或ハ集会所」のような大きな部屋を作ることが協議され、八月五日の会議では「講義並演説集会ニ使用スルノ大堂」を建設することを議決した。結局一四年二月五日条によれば、小学校を「演舌館」に改修して近日中に「演舌会」を開くことになり、三月一三日の開館式では、いずれも福澤の門下生である奥平毎次郎と中野松三郎が挨拶し、島津万次郎は演説を行った[53]。このように多様に展開していた中津市学校であったが、やがて閉校に至ることになる。

六　近代社会の形成

（一）人間交際と自主自由

福澤は、近代社会がどのようにして形成されると考えていたのか。「中津留別之書」の中で「一身独立」と「自主自由」の重要性を主張し、「一身独立」から「一国独立」への道筋をしめしたが、実際には「一身」と「一国」はいかにして結びつくのか。福澤は「自主自由」の説明として、「他人の妨を為さずして我心のまゝに事を行う」、すなわち他人を尊重しながら自己を主張することが「自由」であると述べている。[54] 封建社会は、「由らしむべし知らしむべからず」という言葉が表わすように、お上という絶対的な存在があって、それにただ従っていればいい社会であった。しかし新しい社会は、明治政府の言葉を借りれば「万機公論」に決する社会であり、主体的な存在となるのは「人心」であるという。政府の意図が言葉上にすぎなかったとしても、そのような方針を宣言したことは事実であり、宣言された社会を実現しようとするならば、個人の主体化が鍵になると福澤は考えた。ゆえに「一身」の「独立」を基礎においたのである。そして「一身」からの展開で重要となるのは、人と人との交わりである。

冒頭に注目が集まる『学問のすゝめ』は、しかし「人にして人を毛嫌いする勿れ」という大尾の言葉も彼の構想を理解するうえで重要である。彼は一七編に及んだ『学問のすゝめ』を、人と人との交わりの大切さで締めくくったのである。『学問のすゝめ』第九編および第一〇編は、再び中津の旧友に対して説いたものが基になっている。ここでは、人間の働きには「一人の身に就ての働」と「人間交際の仲間に居り、その交際の身に就ての働」の二つがあることを述べる。「人間交際」（「じんかんこうさい」と読ませたと言われている）は、この交際の身についての働きで、人間にとって必須のものであり、これがあるからこそ人間の世界は「学問」があり、「工業」が発達し、「政治」が起こり、「法律」をつくるようになる。[55] 明治一九年の『男女交際論』では冒頭で、交際をしないのは人間ではないとまでいっている。

> 人の世に在る、往来交際せざるべからず、往来交際せざれば社会存すべからず。社会存せざれば人間無きなり。[56]

福澤は「豊前豊後道普請の説」の中でも、交際について説いている。[57] 中津の道路建設を題材に、人と人とが議論交渉する中で結論を見出すべきことを述べる。その際発端は私心でいい、自分のところが便利になってほしいという気持ちから発するのでいいという。しかし自分のところが便利になるために他の妨げを為すのであれば、自主自由をないがしろにすることにな

る。他人の妨げをなさずして自分の主張をするために、交渉し折衝する。「世の中に最も大切なるものは人と人との交り付合なり。是即ち一の学問なり」と、人間交際は一つの学問であることを述べている。

（二）教育の儒教主義化と中津市学校閉校

明治一〇年代半ばになると、教育の「儒教主義化」が生じる。それに対し福澤は、当初かなり楽観していた。以下の書簡にあるように、これまで洋学による「文明開化」が進み、教育現場においても新しい理念が普及しつつある中、たとえ反動主義が現われたとしても一時的なものであり、歩んできた道が崩れることはないと考えていた。

日本之教育ハ近来益儒教主義とて、頻ニ支那学を勉め、可笑しき次第なれ共、固より永久ニ持続可致ニもあらず

（明治一六年九月二一日付福沢一太郎・捨次郎宛書簡）[58]

教育ハ儒教主義之為メ大ニ騒動して、之が為ニ金を費し、人を進退したる事も少なからず、然るニ近来ハ漸く其迂なるを悟りたるか、仁義礼智信之沙汰も薄く相成、矢張英書ハ読むが宜しとか申ス事なり

（明治一八年四月二八日付田中不二麿宛書簡）[59]

しかし明治二〇年代になると、この傾向がますます強くなり、学校教育においても『教育勅語』のように具現化され、福澤も危機感を感じるようになる。

明治十四、五年之頃より、何か政府之様子改まりて、教育之風を云々し、所謂老儒碩学抔を用ひて、文明流を擯斥したる、其影響ハ何れ之辺ニ発するやも知る可らず、当局之長老輩も、今後ハ少しく注意して可然

（明治二四年五月二二日付清岡邦之助宛書簡）[60]

表面的な近代化が進んでも、根本からの転換は容易には行われていなかった。たとえば条約改正をめざし対外的には西洋法が導入されたとしても、人びとの意識や習慣が変化しなければ、その法律は有効には施行されない。福澤は「日本婦人論」の中で、男女の平等に関して「同権の根本は習慣に由来するものにして、法律の成文は唯その習慣の力を援るに過ぎざるのみ」と述べている。[61] 法律で夫を訴えることができるようになったとしても、学校や家庭において妻は三歩下がって夫に仕えるべきであると教育すれば、法律は平等化に有効には働かない。

先述のように、一時は「関西第一ノ英学校」となった中津市学校も、明治一六年一月二一日の会議で閉校が決定した。それまでにも、生徒数の減少の著しい「原書」の廃止が何度も検討

されているので、生徒数の減少が大きな要因であったことは事実であろう。また生徒数の減少とも関連するが、金銭的な問題もあった。明治五年には早くも中津市学校を公立の学校とする話が出たようだが、その後時折公立学校あるいは師範学校と合併する話が議論されるようになる。合併をめぐるやり取りについては、詳しくは前掲拙稿「中津市学校に関する考察」を参照されたい。明治一一年一〇月九日付香川真一宛書簡を読むと、主に資金の問題から、福澤も公立学校へ移管することを望んでいたことがわかる。前述のように中津市学校は奥平家の家禄の一部と、士族たちの互助組織天保義社からの拠出で運営されていたが、奥平の家禄は先の福澤の書簡によれば「（明治九年―筆者注）同年華族の禄制変改に逢ひ、これより奥平家年々の寄附は学校より辞退」することになり、また家禄も天保義社も資金のほとんどが藩札によっていて、常に額面通りの価値が担保されていたわけではなかった[62]。ゆえに合併話は中津市学校にとって悪い話ではなかったが、しかし一部の士族たちには不満を生む原因になっていた。前掲書簡には「何程に双方心を用るも、或は些末無用の事よりして又例の不熟不和と申事は出来間敷哉」とあり、中津の士族社会の根底に「不熟不和」の種があった。

（三）変容しない士族社会

中津市学校の閉校が順調ではなかったことは、次の三種類の資料から推測される[63]。一つ目は「中津市学校閉校処分書」とあるもので、明治一六年二月六日付で、奥平昌邁から山口広江、菅沼新、島津万次郎、中野松三郎、山口半七、稲毛毎次郎、古宇田与九郎に宛て作成されたもので、生徒数の減少から閉校に至り、今後は残余金を用いて養蚕業に従事すること、女学校は継続し、さらに「開運社」を組織して、同社を通じ毎年三名を東京に留学させることが記されている。先の会議における決定とほぼ同じ内容である。二つ目は「旧知事様御書写」とあるもので、「中津市学校閉校処分書」と同日の明治一六年二月六日付で奥平昌邁から逸見蘭畹、桑名豊山、鈴木閑雲、山口広江に宛てて出され、近年旧中津藩士の中に「不如意之者」が増加している、「君臣の情誼」は断絶したが、祖先に対する武功は心に銘じている。「心身ヲ文武ノ諸芸ニ委タル者」が農工商に従事する辛苦はわかるが、「倹素勤勉」し「一家独立之計」をなし、「子弟之教育」に心掛け、「家名ヲ堙滅」させないように勤めるべきであると述べられている。後者には「学兄小幡君」に「巨細心事」を語ったので「百事御談合」するよう書き添えられている。最後は翌三月に小幡篤次郎が演説した「閉校の主旨」である。『中津歴史』にはその演説内容が引用されており、他に様々な学校ができ市学校の必要性がなくなったこと、運営

を見直すにしろ学校の「資本金」は教育以外の用途には使用すべきではないこと、「学生給費ノ制」を設け毎年三名ずつ修学費を給付することが語られている。[64]

同じ日付で一方では学校の不振を説き、他方では開校時に「中津市学校之記」に綴ったような内容を述べる。さらに閉校時の演説は「中津市学校閉校処分書」と同様の事柄を取り上げながら、ニュアンスは多分に異なっている。これは士族間で中津市学校閉校に対する立場に、差異が生じていたことの証左となろう。

中津市学校に出資した、士族たちの互助組織である天保義社は、天保年間以来、藩が俸禄の一部を災害時の対策として藩庫に入れた、「お借り上げ」が元になっている。廃藩置県の段階でこの金の帰属先が問題となり、中津士族たちの働きかけで士族たちの元に戻り、管理組織として天保義社が設立された。天保義社は資金を冠婚葬祭時の弔慰金や祝金に使用するほか、銀行類似組織のように小口の貸付なども行っていた。天保義社の資金が中津市学校に使用され、その中津市学校が閉校して解散するとなると、資金の行く先を巡って様々な思惑が生じ始めた。そもそも資金の運用を巡っては密かに不満を抱く人もあったようだが、この一件で対立が大きくなり、中津の士族社会を二分する紛議となった。遂に明治一六年一一月頃には、東京の法廷に持ち込もうとする騒ぎにまで発展した。[65]福澤も紛擾を収めるために尽力するが、紛議の様相を見る限り、旧中津藩の士族社会の中では、彼は一三石二人扶持の一下級武士にすぎなかった。明治以後も中津の士族社会で上士下士の分断が続いていたと思われるのは、ある上士階級の家に残っていた分限帳を見ると、人名の記載の脇に明治以降に用いるようになった名前が書きこまれているが、みごとに上士階級の部分のみである。[66]交流のある人物について、便宜のために加筆したのであろうから、明治以降になっても少なくとも中津においては、上士下士間の交流が自然に生じるようになったわけではないことがわかる。紛議に際して、福澤に代わって前面にでたのは、二〇〇石取の上士階級出身小幡篤次郎であったが、しかし彼であっても、紛議を収拾することはできなかった。

結局最終的に収めることが出来たのは、旧藩主奥平昌邁であった。明治一六年一〇月三日付で、福澤小幡の連名で旧中津藩の重臣逸見蘭畹、鈴木閒雲、山口広江に出した書簡には、訴訟に持ち込むことが「旧知事様」の耳にも入り、訴訟になれば「旧士族一般ノ不利ハ無論、奥平家之体面ニ関する事不少」、対立する双方が奥平昌邁宛の上申書を出すか、代表者を東京におくるか、東京から「御使ノ人」を中津に出すかして「穏便」に処理をしたい「思召」であり、中津で協議するようにと書かれている。[67]連名ではあるが小幡の筆跡である。士族社会の中で議論や交渉を重ねたところで、結局力を発揮するものは旧幕時代

の威光であった。「旧藩情」によれば、中津市学校によって士族社会の門閥は、古証文に墨を引くように解消にされたはずであったが、根本から変容していたわけではなかったのである。

福澤は、近世を通じての教養の蓄積を考えれば、ミドルクラスをなして変革を牽引することができるのは、士族層であると考えていた。『学問のすゝめ』第五編は「ミッヅルカラッス」の役割を論じ、慶應義塾の人びとに「ミッヅルカラッス」たらんことを期待している。明治七年当時、慶應義塾入学生は七割が士族であった。また「旧藩情」や「分権論」の中でも、士族層へのリーダーとしての期待を述べている。[68] しかし士族たちは、少なくとも中津の士族たちは「一身独立」を果たすどころか、旧幕時代の門閥や家の序列から解放されていなかった。中津市学校の問題をめぐって、福澤は士族における「家」意識の強さを再認識することになった。

明治一〇年代末頃から、福澤は盛んに女性論や家族論を著すようになる。門閥や「家」を解体するためには、生活実態としての家族を変容させる、またその前提として男女関係を改めることが重要であると考えた結果と分析できよう。

七　中津にとっての福澤と福澤にとっての中津

福澤の「横文字」への関心は、強い目的意識に端を発したのではなく、元来彼が持っていた好奇心によるものであったと想像される。そして緒方塾での思考訓練が、その後の彼の思想的展開の前段階を形成した。彼に訪れた大きな転機は、幕府遣欧使節への随行であり、西洋文明を直接見聞する機会を得た彼は、文明間の圧倒的差異を知り、西洋文明の体系的理解の必要性を実感した。

西洋文明を目の当たりにした福澤は、大きな変革を果たさなければ、日本を維持することはできないと感じた。「日本」や「国家」という枠組において独立を維持しようとするのであれば、大きな変革が必須であり、それは洋学による人材の養成であった。ただ彼の目指す「大変革」は、政治体制の変革までを意味したわけではなかった。変革は必要ではあるが、あくまで徳川政権の下で行われるべきで、安定した政治の中でこそ、文明開化は進んでいくと捉えていた。

しかし徳川政権は、福澤が考えていたよりも脆弱で、あるいは守旧的ではなく、版籍奉還を迎えることになった。版籍奉還による封建体制の崩壊によって、武士たちは拠り所となる身分制度を失い、自分たちは何のために存在するかという大きな課題に向き合わなければならなくなった。また身分制度の解体は武士だけの問題ではく、生産的な生活手段を得ていた農工にとっても、あるいはその流通を担う商にとっても、根本的な変化となったはずである。福澤は、新しい近代社会を構築するため

に、もっとも基礎となるのは「一身独立」であり、「一身独立」して主体化した個人が社会を形成し、国家に展開していく過程を構想した。そのために重要であるのは、「文学」すなわち「学問」であり、「人間交際」であった。

彼はこうした考えに基づき、中津のために「中津留別之書」や『学問のすゝめ』初編「中津市学校之記」を執筆し、中津市学校の設立運営に尽力した。また旧藩主を初め多くの中津出身者が、慶應義塾で学んだ。

一方本稿で見てきたように、彼にとっても、中津は日本の近代化を構想する上で、必要不可欠な存在であった。明治初期に福澤が行なった業績は、中津との関係なくしては考えることができない。教育活動しかり、『学問のすゝめ』をはじめとする著作活動しかりである。中津は、特に明治初期の彼にとって、活動のひとつの舞台であった。中津社会との関わりが彼の思考を発展させ、また中津で得た人材が彼を助けた。中津は一面では、譜代一〇万石の藩として封建体制を守り、他方で伊達宗城の子を養子に迎え、幕末の政局に対応しようとする柔軟性もあった。身近に中津という確かなモデル、実践の地を抱えたことで、彼の構想は確実化し、具現化された。

これからの課題として、近世から近代への転換に際する近世の諸システム、村請制度や宗門人別改などが、中津においていかに解体したかの検討も重要である。地方制度の改革や地域の産業構造の変化は、農民や町人にとって切実な問題であった。福澤がこれらをどの程度把握していたのかも、彼の近代化構想に対する評価を考えるうえで重要であろう。

中津の士族社会は、変容したかに見えて、実は福澤が考えていたようには進んでいなかった。その忸怩たる思いが、中津へのアンビバレントな思いとなり、冒頭で述べたような『福翁自伝』の中での否定的な表現に繋がっていくのであろう。福澤の考えを分析するにあたって、中津は重要な要件の一つであると考える。

注

（1）『福澤諭吉著作集』（全一二巻、慶應義塾大学出版会、二〇〇二～二〇〇三年。以下『著作集』と略す）第三巻、一四頁

（2）『福翁自伝』は口述筆記で始まったが、福澤による加筆訂正が多く、著作と位置づけでよいものであろう。詳しくは河北展生・佐志伝共編『「福翁自伝」の研究』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年。『著作集』第一二巻、二八～二九、三三五～三三七頁

（3）『著作集』第一〇巻、八頁

（4）『著作集』第一二巻、二八頁

（5）ヴォルフガング・ミヒェル「中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について」『中津市歴史民俗資料館分館　村上医家史料館叢書五　人物と交流Ⅰ』二〇〇六年

（6）黒屋直房『中津藩史』第二刷、国書刊行会、一九九一年（初出一九四〇年、五四六頁。野田秋生「中津藩海防論の中の福澤兄弟」

『大分県地方史』一九四、二〇〇五年
（7）平凡社東洋文庫一六八『青木周蔵自伝』第七刷、一九九四年、三～九頁
（8）『福澤諭吉全集』（全二一巻および別巻、岩波書店、一九六九～一九七一年、以下『全集』と略す）第一九巻、七七七～七七八頁
（9）福澤については、富田正文氏の細やかな考証がある（『信州福澤考』私家版、一九八六年）。またその後も様々な見解が発表されている。また仕官については、福澤家と関係が深く、中津明蓮寺には福澤と二家で一基の墓を持つ、飯田家と関わりがあるのではないかともいわれる。拙稿「信州と福澤氏」『信濃村上氏フォーラム～ふるさとの村上氏をめぐって～』坂城町教育委員会、二〇一六年
（10）『全集』第一九巻、二五三～二六一頁。福澤諭吉やその子孫による加筆もある。
（11）文久元年一二月二〇日付老中安藤信正より使節竹内下野守保憲、松平石見守康直、京極能登守高明への訓令。『日本思想大系66西洋見聞集』岩波書店、一九七四年、五九八頁
（12）『福澤諭吉書簡集』（全九巻、慶應義塾大学出版会、二〇〇一～二〇〇三年。以下『書簡集』と略す）第一巻、一二～一四頁
（13）『慶應義塾紀事』『全集』第一九巻、四〇九頁
（14）馬場孤蝶訳「馬場辰猪自伝」『馬場辰猪全集』第三巻、岩波書店、一九八八年、六四頁
（15）『著作集』第一巻、八〇頁
（16）「本邦」および「御家」前で改行の礼がとられていることも、封建体制に対する一つの意識であろう。
（17）『書簡集』第一巻、五七～五八頁
（18）『全集』第二〇巻、一三～一五頁
（19）同右七～一一頁
（20）『書簡集』第一巻、三五頁
（21）『全集』第二〇巻、一三頁
（22）『書簡集』第一巻、五七頁、六五頁
（23）同右八一～八二頁
（24）『福翁自伝』『著作集』第一二巻、一九五～一九八頁、二一二～二一三頁。自伝によれば、福澤は江戸城内で脇屋が同心に連れられていくところを見、また検視に参加した高松彦三郎は福澤の知人であった。また謹慎処分に関しては、「私の不従順と云うことも十分である」とも述べている。
（25）『書簡集』第一巻、一一四頁
（26）同右一二七頁
（27）同右一三八頁
（28）同右一三三頁
（29）同右一三八～一三九頁
（30）『著作集』第一〇巻、二～八頁
（31）奥村弘「三田藩廃藩と福澤諭吉・岩倉具視―華士族再編構想としての「学族」論―」『日本史研究』六五五、一三七～一四二頁
（32）『著作集』第一二巻、三三六頁
（33）前掲奥村論文
（34）『書簡集』第一巻、一二八頁
（35）前掲拙稿「中津市学校に関する考察」、一〇五頁
（36）慶應義塾は、明治六年になると大阪に大阪慶應義塾を設け、以後九年までの間に京都慶應義塾、徳島慶應義塾ができるが、四年の段階では三田（現東京都港区）に移転して一年たっておらず、余裕がなかったこともあろうし、なによりも中津であるからこそ慶應義

塾という福澤の私塾ではない方がよかったのであろう。

(37) 明治一一年一〇月九日付大分県令香川真一宛書簡。『書簡集』第二巻、一〇一頁

(38) 前掲拙稿「中津市学校に関する考察」、一〇五頁

(39) 『書簡集』第一巻、二二四頁

(40) 廣池千九郎『中津歴史』（全二巻、復刻版、防長史料出版社、一九七六年、初出は一八九一年）下、二四五頁

(41) 同右三〇七頁

(42) 『著作集』第九巻、二五、二七頁

(43) 『資料が語る廣池千九郎先生の歩み』改訂五刷、モラロジー研究所、一九七三年、二六～二七頁

(44) 『中津歴史』下、三〇八頁

(45) 明治二一年一〇月七日付矢田績宛書簡。『書簡集』第六巻、五八頁。

(46) 「英吉利法律学校開校式における福澤の祝詞」『明法志林』第一〇五号、一八八五年一〇月一五日刊。岩谷十郎「福澤諭吉と法文化」小室正紀編著『近代日本と福澤諭吉』慶應義塾大学出版会、二〇一三年、二一二～二一三頁

(47) 「県内士民え文学告諭文」は福澤研究センターが小倉藩稲葉家より寄贈をうけた資料中のものを参照した。「布告文上木伺」は前掲拙稿（『近代日本研究』一六）、一〇四頁

(48) 『著作集』第三巻、一四頁

(49) 同右六～八頁

(50) 慶應義塾図書館蔵。マイクロフィルム版福澤関係文書（雄松堂フィルム出版、一九八九～一九九八年　以下マイクロ版福澤関係文書と略す）K15A0101

(51) 鈴木栄樹「最後の彦根藩主井伊直憲の西洋遊学―一大名華族の西洋体験―」佐々木克編『幕末維新の彦根藩』彦根市教育委員会、二〇〇一年

(52) 前掲拙稿「中津市学校に関する考察」に、残されている「一号」の全文を掲載している。

(53) 『田舎新聞』明治一四年三月一六日付二九八号、三月一九日付二九九号。

(54) 『著作集』第一〇巻、二頁

(55) 『著作集』第三巻、一九六、九六、九八～九九頁

(56) 『著作集』第一〇巻、一〇二頁

(57) 『全集』第二〇巻、一二八頁

(58) 『書簡集』第四巻、九頁

(59) 前掲『近代日本研究』二三、二〇〇七年、二五二頁

(60) 『書簡集』第七巻、七一～七二頁

(61) 『著作集』第一〇巻、四七頁

(62) マイクロ版福澤関係文書「中津市学校教員手記」K15A02

(63) 前掲拙稿「中津市学校に関する考察」、一三八～一三九頁。前掲『中津歴史』下、三〇九～三一〇頁

(64) 同右八九～九〇頁

(65) 拙稿「天保義社に関わる新収福澤書簡」『近代日本研究』一三、一九九七年

(66) 中津黒瀬家分限帳

(67) 『書簡集』第四巻、一三頁

(68) 『著作集』第三巻、五五～五七頁、「慶應義塾入社生徒年表」『慶應義塾紀事』、『著作集』第七巻、七、四八頁。正確にいえば福澤は「余輩が所謂士族とは、必ずしも双刀を帯して家禄を有したる

武家のみを云うに非ず」と述べ、純然たる武士のみでなく地方名望家も含んでいる。

（キーワード：福澤諭吉、中津、士族社会）

（編集者注：本稿は、平成二十八年十月二十六日に開催された道徳科学研究センターの「特別研究会」の内容に筆者が加筆・修正したものである。）